

序 文

この研究の発端は、新幹線の車中での、缶ビール片手の会話であった。本研究会のメンバーである赤澤教授と、山口県のある民俗資料館を訪ねた帰途のことである。その地には有名な弥生遺跡もあって、それをも見学するという、法律学者である私にとっては稀有な体験をした直後であったせいか、車中の会話は、赤澤教授の専門である考古学、人類学についての、私にとって貴重な耳学問の場となった。

〈縄文時代は戦争がなかったが、弥生時代になると戦争が行われるようになり、人間を殺傷する武器が開発された〉。いうまでもなく、これは我が国の考古学上ほとんど確立した命題である。私には、その正否を判断する知識も能力もない。ただ、この命題がどれほどの根拠に基づいたものなのか、ずっと素人なりの疑問はもっていた。

一つは、両時代の武器そのものの違いは、果たして人の殺傷力の有無に対応するものなのか、という「モノ」の次元での問題。もう一つは、弥生時代に国家が発生したという説と武器の性能論とのつながり、という「社会」の問題。いうまでもなく、前者は物理的な問題であるから、私などが宙でいくら考えても答えが出るものではない。しかし後者は、社会のあり方と技術、道具との関係という、まさに社会科学的問題であり、私にとって気になる問題だった。

私自身二十余年、古代末期から中世へかけての「合戦」の研究（拙著『日本人の国家生活』第一章）をしたときも、それが念頭にあった。私にとっては「合戦」は法や国家の歴史の問題であった。そのとき得た一応の結論は以下のようなものであった。

すなわち、日本の古代国家は中国の精緻な律令制を導入して、法と秩序が確立した国家のように見えるが、その法システムを分析してみると、意外に脆弱であり、紛争解決や秩序維持に責任と能力を十分にもつ国家とはいえないものであり、その分、私人の実力行使・自力救済が紛争解決・利益実現の手段として果たす役割は大きかった。ところが、院政期になると、国制の構造が変化し、それにつれて「合戦」の意味、政治的役割が変わり、その具体的な様相も一変した。そして、そのことと武器との関係は…。

しかし、ここはその詳細について記す場ではない。「結語」において、本研究の総括をするところに譲るべきであろう。いずれにせよ、こうした私なりの問題意識を赤澤教授にぶつけてみたところ、この二つ、つまり「モノ」の問題と「社会」の問題を結びつけた学際的研究を、国際日本文化研究センターの共同研究として提案してみようということになった。そこで、いろいろな分野の研究者に打診したところ、大きな反響があり、考古学、民族学、歴史学はもとより、武器の性能分析に欠かせない工学や情報科学の分野を含めて強力な布陣を敷くことができた。

ただ、この問題領域はまことに大きな広がりをもつものであるだけに、我々は当面の研究対象を出来るだけ絞り込むこととし、結局「モノ」は弓矢、「社会」は日本の歴史的社會を中心に据えることとしたが、その絞り込んだ対象を広い視野と学際的観点から探求しようとした点にわれわれの研究グループの特徴がある。本書はその研究成果の報告書である。

研究結果のとりまとめには、私自身の身分変動その他の事情から思わぬ長時間を必要としたが、幸い、私の退官後、宇野教授が研究代表者の仕事を引き継ぎ、精力的にとりまとめ作業を推進してくださったので、ここによく上梓に漕ぎ着けることができた。同教授はじめ研究グループの同人諸氏に、この場を借りて心から御礼申し上げる。

2002年6月

石井紫郎